

+ 7 0 【こら】

「古来、百物語（ひゃくものがたり）なるものがあります。当然、われらが金ちゃんのごぞんじでしょうね」

前ぶれもなく懐爺が口をひらきました。

当然、といわれれば、

「しらいでか」

といたかったけれども、ここは正直に、

「しらん。まえに、かいじいにきいたかもしれんが、わすれた」

といました。

そこで懐爺はいきおいこんで、喋り始めます。

「百個の灯りを点けて、参会者が一人ずつ怪談話をします。終わるごとに、灯りをひとつずつ消します。百の怪談話が終わったら、当然真っ暗やみになりますね」

「それはそうじゃ。けいさんどおりじゃ」

「するとたちまち、箆笥（たんす）に目鼻がついて、これなんだんす、といただきます。鏡台は、刀をふりまわして、兄弟すすめえ、と号令をかけます。下駄は、げたげた笑い、傘（からかさ）は、かさかさ這い回ります」

「うそこけ。まっくらやみなのに、たんすに、めはながついとるか、だれがわかるんじゃ。かたなをふりまわしとるのを、いったいだれがきづくんじゃ。げたげたかさかさは、ほんまにげたとかさのしわざなんか。おぼけはだじゃれがすきなんか。おぼけもだじゃれがすきだとしたら、おもしろいがのう」

「まあその、そういわれてしまえば」

懐爺は歯切れがわるくなります。

だいたい百も怪談を聞いたら、眠くなって頭はぼけて、なんでもかんでもおぼけにおもえるだろう。

「それで、かいじいは、なにがいたいんじゃ」

気が短いぼくは急かしました。

「つまりその、じつはまあ」

ますます歯切れがわるい。

「はよせい」

「わたしたちは、百物語どころか、二百物語はやっていますよね」

「やっどる。それがどうした」

するとそのとき、これも前ぶれがなく黒雲が天空を覆いました。

それこそ、真っ暗やみになったのです。

「でますよ、でますよ」

懐爺はまた元気がでてきました。

「なにがでるんじゃ」

「【こら】、でますよ」

「こらじゃ、わからん」

ぼくがそういったとたん、懐爺の住処（すみか）である祠（ほこら）が、大口を空けて（見たわけではなくそうかんじたということですが）

「こら、こら」

とぼくを叱りました。

「なんじゃ、こら」

とさけぶと、

「こら、こら」

と、また叱りました。

どうして叱られるのかわかりませんでした。ぼくは

「すまんのう」

と謝ってしまいました。

気づくと黒雲は去り、優しい夕方の陽がさしていました。